

VI-26

建設界の国際化に関する国内・外技術者の意識調査とその評価

芝浦工業大学（正）足立 格一郎（学）○名取 和典 福澄 浩恒

1 はじめに

近年、経済成長とともに建設投資が大幅に上昇し、日本の建設市場は世界最大の市場となっているため、外国企業の日本市場への参入意欲が急速に高まってきた。このような状況下で緊急課題となっている建設市場開放は、建設業界が大きな影響を受けるばかりでなく、日本の政治・経済等社会全体のシステムの構造的な改革にも関係するものと考えられる。また、そうした問題の背景には、習慣・思想等といった日本人の国民性や歴史的背景が影響していると考えられる。そこで、建設界を担う国内・外技術者の意識を調査し、評価することがこのような根底にある問題を少しでも解決するために有効なことであったと考えた。また、社会を目の前にした学生と現実社会の中で働く技術者との間の意識の違いも調査し、その評価を行ったので報告する。

2 調査対象

調査対象は、建設プロジェクトに携わっている国内外技術者、及び土木工学を学んでいる学生とした。なお、国内外技術者に関しては、今後の建設界を担う貴重な存在と考えられる、若年技術者層（主に20～30才代）を対象とした。調査人数に関しては、表-1に示すとおりである。なお、今回の調査では、欧米のシステムをベースに社会が運営されているシンガポールを外国の調査地点として選定した。

3. 調査内容

国内外技術者に対しては、①回答者の構成（年齢、性別、結婚、職種）、②業務上の問題（組織、外国人雇用、相互信頼、問題の処理等）、③業務周辺の問題（転勤等）、④社会環境の問題（終身雇用、入札制度等）、⑤感じていること（企業に求めること、海外への関心等）といった12の質問を行った。学生に対しては、類似した10の質問（業務上の問題を除く）を行った。

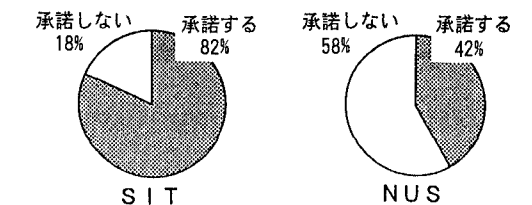
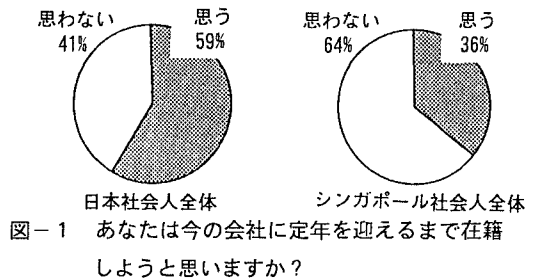
4. 調査結果及び考察

調査内容で述べた質問のうち、国内外技術者の意識に大きく違いが現れたものを図-1に、学生の意識に大きく違いが現れたものを図-2に示した。日本では社会人・学生の何れにおいても、終身雇用を前提とした会社への帰属意識の強いことがうかがえる。

また、個人個人のマネジメントの差をどのように捉え得るかという「マネジメント・スタイル分析」を用いて、これらの調査結果を基に、人間のタイプを分類してことにした。マネジメント・スタイルは、情報収集時の感覚と直観の機能と、情報評価時の思考と感情の機能のどちらに重きを置くかによって4種類に分類される。各質問は、この心的機能のうちの少なくとも1つの要素を持っていると考えられるため、調査結果を点数化して

表-1 調査人数

		日 本	シンガポール
学 生		39名	34名
社会人		73名	75名
社会人の内訳	公務員	21	17
	コンサルタント	19	29
	建設会社	23	26
	その他	10	3



(SIT: 芝浦工業大学) (NUS: シンガポール国立大学)

みた。その結果、日本人は直観・感情型となり、これとは対照的にシンガポール人は感覚・思考型になった（図-3）。

日本の企業が人を雇用する場合、「その人の仕事に対する能力」に重点を置いているのではなく、「その人自身」に重点をおいて雇用しているものと考えられる（終身雇用、年功序列等の慣行があるため）。このことから、個人の能力が次第に向上し、またそのことが効率よく企業の経営システムの中で機能していくこととなる（直観・感情型の特徴）。

日本と諸外国における約款の中の紛争処理事項について比較すると、日本の標準請負約款では、「甲乙の協議によって定める」という“曖昧な表記”がなされているのに対し、シンガポールを含めた諸外国で採用されている FIDIC（国際コンサルティング・エンジニア連盟）約款では、第三者的な立場にある the Engineer に報告書（問題となる趣旨）を提出し、それから the Engineer が決定を下す等の詳述がなされている。このことから、日本では、相互理解を基本とする人間関係及び相互信頼の下で紛争処理決定がなされるため、諸外国の運営で重要な the Engineer のような第三者的存在は必要がなくなる（信頼重視＝直観・感情型の特徴）。一方、諸外国では、紛争処理に限らず、クレーム等についても文書による報告書を提出しなければならないことから、the Engineer の存在が必要となる（書類重視＝感覚・思考型の特徴）。

学生については、SIT は直観・思考型、NUS は感覚・思考型となった。SIT の学生は「将来企業に入ったら組織の意向を優先させる」としている（図-2 参照）にもかかわらず、別の質問の回答で「給与等が好条件ならすぐにでも職場を変える」という意見が NUS なみに多かったため、思考型に近づいたものと思われる。これは、日本の社会システムに未だ完全に染まっていないため（大部分の大学では、建設マネジメントに関する講座が設けられておらず、それゆえ、現実の建設に関するシステムを知らない等）であり、将来の建設界の改革への可能性を示唆するものと考えられる。一方、NUS では建設マネジメントに関する講座が設けられており、それゆえ、現実の建設に関するシステムを学生が把握している（就職した際に、即プロジェクト・マネージャーになれるような教育をしている等）ことから、シンガポールの社会人の意識に近づいていると考えられる。

5. まとめ

日本のマネジメント・システムは日本人の思考に合わせて発展したものであるため、大変日本に向いている。また、それが日本の建設技術を世界のトップレベルにした理由の一つともいえる。しかし、それが国際市場からみると特殊なものである。従って、日本人の人間性と諸外国の合理性という対称的なものの長所をうまく融合していくことができれば、国際市場として日本の建設市場が真に開かれたものになると考えられる。それには、実際に建設界で働く技術者自身が、マネジメントに関する関心・知識・問題意識を高め、諸外国とコミュニケーションすることが重要なことであると考えられる。

参考文献 1) 馬場敬三：無意識のマネジメント、1989、中央経済社 2) 國島 正彦・庄子幹雄：建設マネジメント原論、1994、山海堂 3) Hellriegel, D., Slocum, Jr., J.W. and Woodman, R.W.: Organizational Behavior (third edition), West Publishing Company, New York, 1983

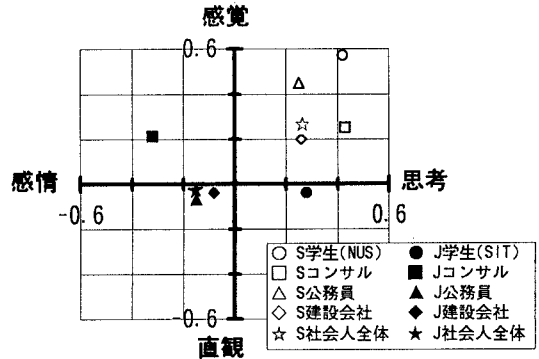


図-3 マネジメント・スタイル分析結果

表-2 標準請負約款とFIDIC約款の比較

	標準請負約款	FIDIC約款
紛争処理決定	甲乙の協議	the Engineer
the Engineer の立場	一般に存在しない	中立
紛争処理の期日	はっきりしてない	明記されている